

「さいたま市生涯学習ビジョン」を  
実現していくための方策について  
提言

令和5年11月

第11期さいたま市社会教育委員会議



## はじめに

さいたま市では、本市の生涯学習のあるべき姿を示すため、第10期さいたま市社会教育委員会議において議論を行うとともに、市民アンケート調査や現場職員へのヒアリング、市長部局との意見交換等を実施し、それらの議論を踏まえて教育政策推進戦略会議において検討を加え、令和3年3月に「さいたま市生涯学習ビジョン」を策定いたしました。

本ビジョンは「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」という3つの方向性を掲げ、「生涯の学びを通じて 自分とまちが輝く未来」の実現を目指しております。

また、文部科学省の第11期中央教育審議会生涯学習分科会も、令和4年8月に出された議論の整理において、『学び』を通じた、人と人のつながり・絆の深まりが、地域コミュニティの基盤を安定させることを生涯学習・社会教育の果たしうる役割として改めて示しており、社会的包摂の実現や、地域コミュニティ構築に関連する者の連携・協力を促進することが地方公共団体に求められています。

第11期さいたま市社会教育委員会議ではこれらの背景を踏まえ、『さいたま市生涯学習ビジョン』を実現していくための方策について」というテーマを設け、協議・検討を行ってきました。

提言の作成にあたっては、庁内の各所管が市民と協働して実施している生涯学習にかかわる事業についてヒアリングを行い、それらの事業から本市の生涯学習の参考となることを検討するワークショップを実施いたしました。

各回で特色ある事業を題材とし、「学んだ成果を地域社会に生かすには」と「生涯学習ビジョンを知り理解するには」という観点から議論を重ね、ここに提言として取りまとめました。

本提言が、将来にわたって本市の生涯学習振興のための推進力として活用されますことを期待いたします。

令和5年11月

第11期さいたま市社会教育委員会議

## 目次

### はじめに

I	「さいたま市生涯学習ビジョン」を実現していくための方策について……P. 1
1	「さいたま市生涯学習ビジョン」の掲げる理念……………P. 1
2	提言を作成するまでの議論……………P. 2
3	人づくりからつながりづくり、まちづくりへ、 発展・展開・循環するための方策……………P. 3
4	学習者と学習支援者双方が「生涯学習ビジョン」を理解する ための方策……………P. 11
II	ワークショップの記録……………P. 15
1	「スポーツ推進委員支援等事業」について……………P. 15
2	「消防団の充実強化」について……………P. 23
3	「高齢者大学事業（シニアユニバーシティ）」について ……P. 29
III	まとめ……………P. 35
	資料編……………P. 36
1	第 11 期社会教育委員会議審議経過 ……P. 36
2	第 11 期さいたま市社会教育委員名簿 ……P. 37

※ 本文中で使われる「チカラ」とは、学習者が学ぶことを通して得られる力量や能力のことを指します。

## I 「さいたま市生涯学習ビジョン」を実現していくための方策について

### 1 「さいたま市生涯学習ビジョン」の掲げる理念

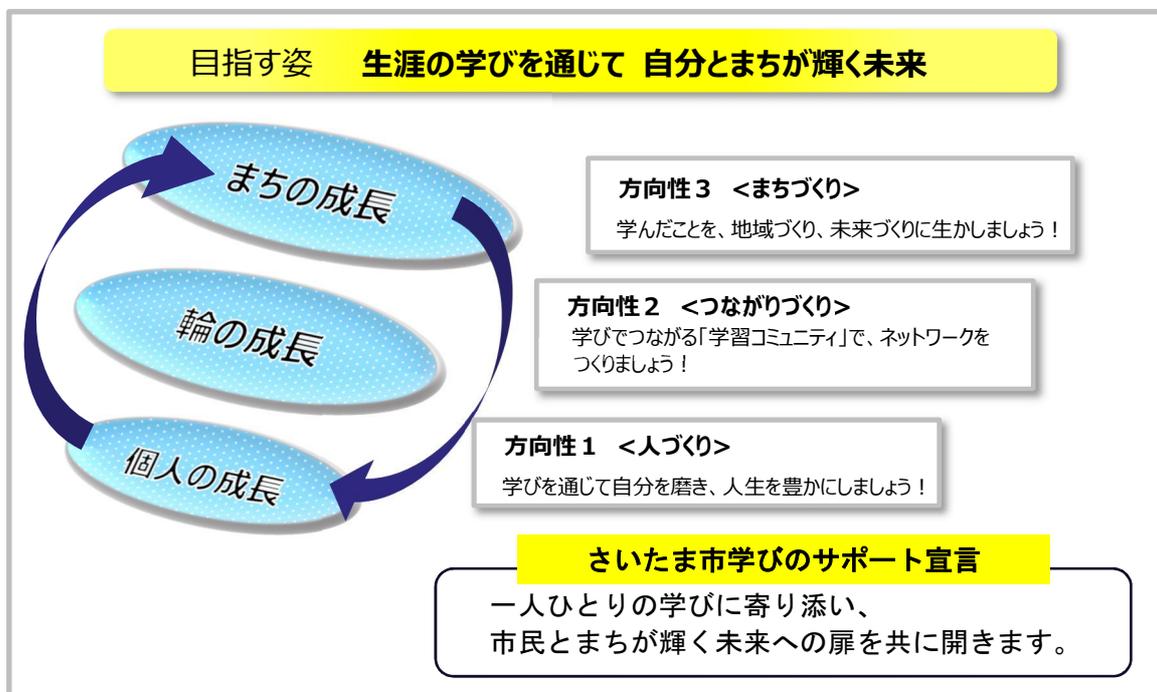
現代社会は、人工知能、ロボット、I o T※1などの技術革新や人生 100 年時代※2の到来、さらには予期できない疫禍や災害等が発生するなど、これまで経験したことのない変化や危機の時代を迎えている。人と人とのつながりや地域コミュニティの重要性が再認識され、私たちが互いの経験を活かし知恵を出し合って支えあう地域づくりが求められている。

また、学びは「学校」という場にとどまることなく、生涯にわたり、地域や職場等のあらゆる場所において行われ、教育によって支えられる側面も多い。私たちが試行錯誤をするなど学びを積み重ねることは、私たちが自らの人生を切り拓くためのチカラになると同時に、変化に対応し危機を乗り越え社会を変革するチカラとなる。

「さいたま市生涯学習ビジョン」(以下、「生涯学習ビジョン」という。)は学びを通じて個人が成長し、他者と協力して新たなアイデアや考えを出し合うことでコミュニティが成長すること。そのコミュニティのつながりが地域づくり、未来づくりに生かされることでまちが成長すること。そして、「生涯の学びを通じて」個人からまちの成長へと循環を生み出し、「自分とまちが輝く未来」を実現することを目指して策定された。

第 11 期さいたま市社会教育委員会議は、この「生涯学習ビジョン」を実現するために、さいたま市の市民と行政がともに取り組むべき方策について議論を行った。

#### さいたま市生涯学習ビジョン（概念図）



※1 I o T … “Internet of Things” の略で、情報機器に限らず自動車や家電などあらゆるものがインターネットにつながる技術を指す。「モノのインターネット」とも呼ばれる。

※2 人生 100 年時代 … 米カリフォルニア大学と独マックス・プランク研究所の調査では、2007 年に先進国で生まれた子どもの半数が 107 歳より長く生きると推計された。それを受け、内閣府の「人生 100 年時代構想会議」では、長い人生をより充実したものとするため生涯にわたる学習が重要と示されている。

## 2 提言を作成するまでの議論

第11期さいたま市社会教育委員会議では、「人づくりからつながりづくり、まちづくりへ、発展・展開・循環するための方策」と「学習者と学習支援者双方が生涯学習ビジョンを理解するための方策」という2つの大きなテーマを掲げ議論を進めてきた。また、提言の作成にあたり、現在さいたま市で実際に行われている事業の良さを洗い出すワークショップを実施し、それぞれの方策を考えるヒントを探った。

ワークショップは「スポーツ推進委員支援等事業」、「消防団の充実強化」、「高齢者大学事業（シニアユニバーシティ）」の3つの事業を対象として実施し、次の4つの視点に整理された。（Ⅱワークショップの記録（p.15）を参照）

### ① 学びの可視化・見える化

学習活動やまちづくり等の活動及びその成果を可視化し、さらなる活躍の場の創出や充実につなげること。

### ② 学びのネットワークや活動の連携・協働

個人・団体・機関等、分野を超えてつながることにより、活躍の場を広げたり活動を発展させたりすること。

### ③ 学びの多様性への配慮

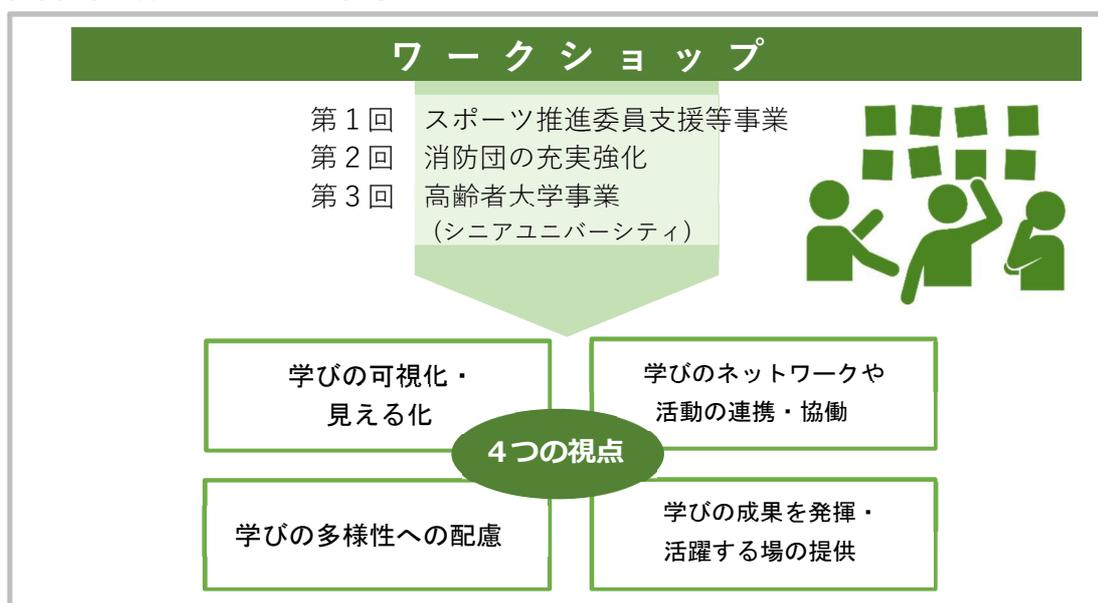
国籍・世代・性別や障害の有無にかかわらず、だれでも主体的に学べるよう、合理的配慮を前提にした学習機会を保障すること。

### ④ 学びの成果を発揮、活躍する場の提供

地域の要請や個人の要望をとらえ、学んだ成果を発揮したり、活かしたりする場を発掘・提供すること。

これらの視点を基にさらに検討を行い、「生涯学習ビジョン」を実現していくための方策をまとめた。

### 提言を作成するまでの議論（図）



### 3 人づくりからつながりづくり、まちづくりへ、発展・展開・循環するための方策

#### (1) 人づくりへ向けて

**課題：**学びを通じた社会・地域課題への気づき、自立性・自律性の獲得・向上  
**要点：**自らの暮らしを自らつくるチカラと、社会やコミュニティのなかで他者について考える視点を持ち、他者とつながりながら自分らしくあるチカラ  
**内容：**生活技術の向上やスポーツ・文化・レクリエーションを含む教養学習等

学びをチカラに変える際に重要なのは、学びの成果を実感し自分のものとするところであり、学びやその成果の可視化と共有、そして活用により実現される。可視化の方法としては文字や映像等の多様なメディアを利用した記録づくり、作品の展示や身体表現を用いた発表等があげられる。学びは記録・作品として可視化され、さらに発信されることにより他者と共有され、互いに高め合うつながりづくりへの展開も可能となる。

また、成果の活用方法の中でも、他者の学びに貢献することが大きな意義を持つ。学習者の作成した記録・作品は、他者への情報提供や学習への刺激を与える機会となったり、学習教材となったりする。また、学習者がその成果をふまえて「講師」を担う等、他者の学習に貢献することを通して、自らの学習成果の価値を実感し自分のものとするのが可能となる。

今後、社会教育・生涯学習行政が連携・ネットワークの要となり、以下のような場や機会を意識的に創出し、機能・充実させることが求められる。

#### <具体的取組>

- 公民館講座等を学習者が講師等として活躍する場、公民館の文化祭や生涯学習フェスティバル等を日ごろ多様な活動を行っている人びとが一堂に会して成果を発表し合う場として充実させる。
- 学習情報提供を行う基礎的なツールである「生涯学習情報システム※1」の生涯学習人材バンク※2の機能を充実させ、広報PRや活用、活動事例の紹介により、講師等として活躍できる機会を創出する。
- また、スポーツ分野においては、「スポーツ推進委員」を育成・支援しており、各スポーツ種目の実技指導者や関連するイベント・地域行事等の運営の担い手となっている。このような活動の拡充とともに、他分野での推進する人材の育成・支援の場を創出する。
- さらに、地域学校協働活動※3やスクールサポートネットワーク※4への市民の参加を促すこと等により、地域の子どもの学習に貢献する。

## I 「さいたま市生涯学習ビジョン」を実現していくための方策について

他方、障害のある人や外国にルーツを持つ人、介護をしている人、あるいは現役で働いている世代等は、学習や活動への参加のハードルが相対的に高い状態にある。したがって、こうした人びと、当事者の学ぶ権利を保障するために、NPO法人や関係機関・団体と連携・協働して、学習情報や学習機会などの学びを積極的に「届ける」努力が求められる。

### <具体的取組>

- オンデマンド研修、WEB会議システムによる講座や動画配信などICTを活用することで、時と場所を選ばずに、誰でも参加できる取組を拡充する。
- また、翻訳ツールやAIチャットボット、手話等を利用することで、異なる言語を使う人びとに学習情報を提供する。

さいたま市は、コロナ禍においても「生涯学習コンテンツ※5」を創設し市民の学習機会の提供に努めてきた。今後生涯学習コンテンツをはじめ、各事業へのICTのさらなる拡張・発展が求められる。

さらに言えば、これらに取り組む前提として重要なのは、職員を中心とする学習支援者側の学習である。また、関係する行政各部署との連携・協働はもちろん、本市においては当事者団体や支援団体等が既に活発に活動しており、こうした団体との連携・協働を期待する。

- ※1 さいたま市生涯学習情報システム … オンライン上で講座・イベント、団体・サークルなどさいたま市の生涯学習情報を総合的に提供するウェブサイト。
- ※2 さいたま市生涯学習人材バンク … 自身の持つ知識や技能等を教えたい市民や団体を登録・公開し、講師等を探す市民や団体のため紹介する制度。
- ※3 地域学校協働活動 … 地域の住民や団体等の参画を得て地域全体で子どもの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して地域と学校が連携・協働して行う活動。
- ※4 スクールサポートネットワーク（地域学校協働本部） … 地域全体で子どもたちをはぐくむため、学校と地域住民や団体等を結ぶネットワーク。
- ※5 さいたま市生涯学習コンテンツ … オンライン上で利用できるさいたま市の動画等コンテンツ、「学びの泉」「学びの玉手箱」「e公民館」の総称。

## (2) つながりづくりへ向けて

**課題：**学びを通じた協働・共生への意識の獲得・向上

**要点：**自らの暮らしを自らつくるチカラと、社会やコミュニティのなかで他者について考える視点を持ち、他者とつながりながら自分らしくあるチカラ

**内容：**生活技術の向上やスポーツ・文化・レクリエーションを含む教養学習等

スポーツや文化活動などの学習活動の成立・継続・発展においては、個人の学びにとどまらない、協働的な学び合いへの拡張、その第一歩としての出会い、知り合う場づくりが不可欠となる。

### <具体的取組>

- 同じ講座に参加するなど、ある程度共通の関心を持った人びとが受動的に講師の話の聞くだけにとどまらず、ワークショップ形式で語り合う場を創出する。
- このことにより、「集う」だけでなく「出会う」こと、さらに「知り合う」ことが可能となり、その関係性を継続する「つながりづくり」への発展も可能となる。

今後、社会教育・生涯学習行政には、継続的・発展的な学びの提供とともに、学習者同士のつながる場や機会の設定、組織化・ネットワークづくりの支援を意図的に事業に組み込んでいくことが求められる。

### <具体的取組>

- 現在行われている講座では、その場所で出会い、知り合った学習者達が自らサークルを組織することがある。このような「つながる仕組みづくり」を支援するとともに、以下の「さいたま市シニアユニバーシティ」のように学びが進化・発展する包括的な事業を実施する。
- 「人づくり」から「つながりづくり」への展開モデルといえる「さいたま市シニアユニバーシティ」では、同期生が学び合いを継続できる「大学院」コースを設置している。また、自主的なクラブ活動やボランティア活動等を行い、活動をとおして学習者が互いに深く知り合い、仲間づくりにつながっている。
- さらに、「校友会連合会」という自主運営団体が組織され、卒業生・修了生による自発的・自立的な集団活動の機会を創出している。集団活動の内容として、まちあるきや郷土学習などもあり、その先には「まちづくり」への寄与も可能となる。

他方、外国にルーツを持つ人びとの増加、障害や性の多様化等の進展の中で、多様性への理解が広がりを見せているが、同時に分断を生み出す危険性もはらんでいる。社会

教育・生涯学習においては前者を意図的に促進ししつ、後者に抗することが求められる。具体的には多文化共生や人権への理解を促進するための講座やイベント等を通して多様な属性についての理解を広げる。また、前項でも述べたように多様な属性をもつ当事者が学習や活動に参加する際のハードルを下げる努力が必要である。

#### <具体的取組>

- 公民館の文化祭や生涯学習フェスティバル等は、気軽に参加でき、また多様な市民・サークルが集う場となっている。
- さらに、施設・設備のバリアフリー化や多言語化・やさしい日本語化、手話やICTの活用等を工夫し参加しやすくする。

以上のように、現代における「つながりづくり」においては、仲間づくりのような協働性の観点と同時に、社会の多様性を背景とする共生性が重視されなければならない。今後、社会教育・生涯学習行政には、多分野・多属性の集団的活動を活性化しつつ、互いの緩やかな関係性を醸成していくネットワーク的な施策・事業の展開を期待する。

### (3) まちづくりへ向けて

**課題：**学びを通じた当事者意識・創造性の獲得・向上

**要点：**地域のことを我がこととしてとらえ担うチカラと、地域の特質や課題をつかみ、その未来を見通し行動するチカラ

**内容：**私たちの暮らしの場としての地域を再発見する学習、地域の自然・社会・文化・歴史等の固有性を理解する学習（地元学など）、地域の課題を客観的・科学的につかむ学習（市民大学、地域調査学習など）等

ここで重要なのは、第1に自分が地域のつながりのなかで暮らしていると実感することである。現代社会において地域のつながりは、日常的には可視化されることはなく実感できる機会も少ない。そのため、つながりが可視化され、実感されるよう意図的な働きかけが求められる。

#### <具体的取組>

- イベント的な取組としては自治会・学区等の身近な地区単位での祭り等、組織的な取組としては子ども会活動等があげられる。
- 近年、組織的な取組のモデルとなっている「コミュニティ・スクール※1」は「学校の地域への参加」あるいは「地域による学校支援」の側面が強調される傾向がある。「コミュニティ・スクール」は「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みであるため、地域のつながりを可視化し実感できる拠点のひとつとして学校を機能させる。
- 学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことは、まちづくりへの一歩となる。

第2に、地域の特質・固有性を理解し共有することである。それぞれの地域には個性があり、一つとして同じ地域は存在しない。そのため地域の個性を知り互いに共有することがまちづくりへの次のステップとなる。大規模な自治体合併によって成立した本市にとって、学びにより「地域を語る言葉」を獲得し共有することは大きな意味を持つ。地域について考え表現し対話をとおして学び合うことが、共に地域を担う住民のつながりづくりの基礎になるからである。

#### <具体的取組>

- 地域の自然を理解する自然観察等の環境学習や伝統文化に触れる郷土学習等は地域の個性を理解する事業の典型であり、これらに加えて、地域を特徴づける新しい動きを学ぶ機会をつくる。子どもたちが地域に出て行って郷土学習を行ったり、地域住民と共に地域課題を解決したり、地域の行事に参画して共にまちづくりに関わるといった活動が挙げられる。

- 本市の見沼田んぼや大宮の盆栽、浦和のうなぎ、岩槻の人形等が地域の個性を理解する学びの、ヨーロッパ野菜の生産等が地域づくりの活動を理解する学びの代表的な題材となる。また、このような学びを体系化し、地元学・地域学として展開することも考えられる。
- なお、公民館や図書館、博物館などの社会教育施設が、積極的な相互連携・協働により、資料を保存・提供する極めて重要な役割を果たすことが、まちづくりの基盤となる。

第3に、具体的な地域課題に取り組む行動とそのための連携である。泳ぐ能力が水の中で泳ぐ体験を通して得られるのと同様に、地域をつくるチカラは実際に地域をつくる体験を通してしか得られない。そのためまちづくりに向け、具体的な地域課題に取り組む行動を通じた学習が不可欠である。

#### <具体的取組>

- 防災は重要な地域課題であり、避難所に指定されている公民館での避難訓練や避難所運営ゲーム（HUG）※2、学校と地域が連携した防災マップづくりや避難所運営体験等が課題解決のための行動学習として挙げられる。さらに、地域で活動する自主防災組織や消防団など実際に地域課題に取り組んでいる個人・団体・機関との連携により、こうした学習の機会や質を向上させる。
- もとより学びは、市民レベルでも行政レベルでも分野や部署を越えた広がりを持つものであるが、とりわけまちづくりに向けては、より実際的な多分野・多職種連携が必要となる。
- また、近年、前述した「コミュニティ・スクール」と「地域学校協働活動」の一体的推進が求められている。「地域学校協働活動」は、地域の高齢者、成人、学生、保護者、PTA、NPO、民間企業、団体・機関等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動である。子どもの育成や成長を軸として、地域と学校がパートナーとして連携・協働し、意見を出し合い学び合い直接、学習支援を行うことなどにことにより、地域の将来を担う人材の育成を図る。
- これらにより地域住民のつながりを深め、自立した地域社会の基盤の構築・活性化を図ることができ、地域の創生につながっていく、まさにまちづくりに向けた学習活動となる。

最後に、まちづくりへの学びを考えると、地域への愛着や郷土愛の醸成が目標とされることがある。注意しなければならないのは、地域や郷土をテーマにした目標設定により偏狭な「ローカリズム（地域主義）」に陥り、ものの見方が狭くなったり、当事者の排除につながったりする可能性があることである。国外・地域外にルーツや帰属意識を持っている人など、地域には多様な人びとが暮らしている。また、地域そのものも、

他の地域やグローバルな社会との連関のなかで存立している。したがって、まちづくりにおいては、グローバルな視野で地域を理解し、多様な地域住民の共生、そして周辺地域との連携の視点が常に意識されなければならない。

今後、社会教育・生涯学習行政には、「まちづくり」活動の基盤となる「地域を知る」「多様性を理解する」フィールドワーク等も含めた取組の充実やそれらを発展的・総合的に行うまちづくり講座の実施、さらには、まちづくり人材の養成・支援を期待する。

- ※1 コミュニティ・スクール … 学校運営協議会を設置した学校のことを指す。同協議会は学校運営及び当該運営への必要な支援に関して協議する機関であり、地域住民、保護者等の学校運営への参画や学校運営への支援及び協力を促進することにより、学校が地域住民、保護者等との信頼関係を深め、学校運営の改善及び児童生徒の健全育成に取り組む。
- ※2 避難所運営ゲーム（HUG） … Hinanzyo Unei Gameの略。様々な属性を持つ避難者を避難所を模した図上にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こるイベントにどう対応するかを体験する防災カードゲーム。2007年に静岡県危機管理局が企画・開発した。

#### (4)「生涯学習ビジョン」の実現へ向けて

以上、第3節では人づくりからつながりづくり、まちづくりへ、発展・展開・循環するための方策について提言してきた。「生涯学習ビジョン」に示されている「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」には、それぞれ「自立性・自律性」「協働性・共生性」「当事者性・創造性」の獲得・向上といった課題があり課題の解決に向けて様々な施策や取組が行われている。「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」は、「人づくりーつながりづくりーまちづくり」のように、段階的・一方向的に進むものではなく、相互に関連し合う循環構造を有している。循環構造とは、サークル活動に参加し仲間と学び合う中で個が確立されたり、まちづくり活動に取り組む中で新たなつながりが生まれたりすることである。

重要なのは、こうした循環を地域の中で起動し持続させる目的意識的な働きかけである。第一義的には生涯学習事業を直接に推進する教育行政の役割といえるが、まちづくりには行政各部署が関わっておりすべての部署が一定の役割意識を持ち連携・協働して取り組む必要がある。特に「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」の中核となる社会教育・生涯学習行政には、行政各部署が行っている各生涯学習関連事業を上記の循環構造の中に位置づけ、体系化し推進する役割を担うことを期待する。

さらに、「生涯学習ビジョン」が広く知られ、市民に理解され、自由で活発な学習や活動を展開する道しるべとなることを願う。そのための方策については、次章で提言していく。

## 4 学習者と学習支援者双方が「生涯学習ビジョン」を理解するための方策

### (1) 生涯学習ビジョンやロールモデルの可視化について

**要点：**学びの姿と可能性の可視化。自らの学びがどこにあるか、どのように展開・発展できるのかをイメージできるようにすること  
**内容：**モデルを発信、道筋の提示、ポイントなど特典の付与、表彰制度

第1に、市民に「生涯学習ビジョン」を知り理解していただくには、市民が「学びたい」「学ぼう」と考えていたり、学んでいたりする際、その学びと「生涯学習ビジョン」との関係やつながりが見えることが重要である。学びや方向性が見えることにより、自らの学びは「生涯学習ビジョン」というものに関係があるのか？「生涯学習ビジョン」とは？「生涯学習ビジョン」ってなんだろう？など「生涯学習ビジョン」に関心を持ち理解しようとするきっかけにする。

#### <具体的取組>

- 先に示したように各生涯学習関連事業を「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」分野に分類・体系化した上でその位置付けを明示し、参加した事業が「生涯学習ビジョン」のどこに位置するかを市民が理解しやすいようにする。
- さいたま市の発行している生涯学習ガイドブックには、「生涯学習ビジョン」を達成するための取組が紹介されている。さらに、多くの市民が閲覧する「講座・イベントの情報」の各事業に分類を明記する。また、各関連事業のチラシ等には「生涯学習ビジョン@まちづくり事業」などの冠を付すなどの工夫が考えられる。
- WEBサイト等にも同様の情報を掲載するなど、複数の媒体でのPRを行うことで「生涯学習ビジョン」にふれる機会を増やす。

第2に、市民に「生涯学習ビジョン」の理解を深め活用していただくために、自らが学んだ成果をキャリアや暮らし、地域活動・社会活動にどのように生かせるのか、具体的なイメージが持てるようにすることが重要である。そのための方法として、「生涯学習ビジョン」に示されている「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」を実践している個人・団体等の取組をロールモデルとして示し、可視化することがあげられる。そのプロセスを大切にしていくことで、学習者だけでなく、生涯学習支援者が「生涯学習ビジョン」への理解を深める機会にもなっていく。

### <具体的取組>

- 社会教育・生涯学習関係職員等の生涯学習支援者がロールモデルとなりうる個人・団体の実践を発掘し、館報等の各種広報誌やSNS、ポスター、動画等の多様なメディアを活用して発信する。学習支援者がモデルを発掘するだけでなく、広く市民から「生涯学習ビジョン」のロールモデルとなる実践を募集し表彰するような事業展開も考えられる。
- 学習者が得た情報を参考に、自らの取組を「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」へ展開・発展・循環しやすいようにするために、学習履歴をデジタルで記録・蓄積し利活用を図る仕組みをつくる。学習履歴は学習者が学びの成果を実感したり振り返りに活用したりする。
- また、「学びポイント」のように、学ぶことでポイントが貯まっていくようなポイント制を組み合わせることで、学ぶ意欲を高め「生涯学習ビジョン」の活用を推進することができる。

このように、市民が学ぶきっかけやヒントを得て、自ら学びに取り組むことができるようにすること、併せて「生涯学習ビジョン」の広報PRによる見える化を図ること等の相乗効果により積極的な理解を促すことを期待する。

## (2) 学習活動の情報発信について

「生涯学習ビジョン」を実現するためには、情報発信の手段や内容を検討し、学習者と学習支援者双方が学びにアクセスしやすい環境づくりが必要である。

### <具体的取組>

- インターネットやSNS等の新しいメディアはもとより、既存の各種広報誌や掲示板、回覧板等、また口コミのような伝統的手法の活用方法を検討し、これらを併用するとともにわかりやすいキャッチコピーなどを工夫する。
- 前者は一定の関心やスキルを持つ層へ情報を届けるには効果的であるが、そういったものを持たない層へのアプローチは難しい。後者は速報性や気軽さには欠けるが、多様な情報に自然と触れる機会を提供し、新しい関心を喚起するきっかけとなる可能性を持つ。
- また、「顔の見える関係」からの情報である口コミは、受けた側の行動やアクションに結びつきやすく、届けたい情報を届けたい人に確実に届ける手段にもなりうる。

情報発信をめぐるには、障害のある人や外国にルーツを持つ人等の多様な人びとへの配慮が極めて重要である。より確実に情報を届けるには、ICTツールの活用に加え、各属性への支援活動を行う機関や団体と連携することが求められる。

また、情報発信においては行政に限らず、市民側の生涯学習支援者や学習者もまたその主体になりうる。社会教育・生涯学習行政には、多様主体による生涯学習情報発信の支援や機会提供、また発信された情報を集約しネットワーク化することが求められる。本市においては、講座やイベントなどの生涯学習に関する情報や、講師として活動できる方の情報を届ける生涯学習のポータルサイトとして「生涯学習情報システム」を稼働している。「生涯学習情報システム」の更新やリニューアルによるアクセス方法などの利便性やコンテンツの充実などの改善及び新たな活用を含む事業展開を期待する。

### (3) 市民にわかりやすい「生涯学習」を伝える

「生涯学習ビジョン」では、生涯学習の目指すべき方向性として「まちづくり」を位置づけている。しかしながら、市民にとって「生涯学習」といえば「個人の自己実現」がイメージされる現状において、「まちづくり」が生涯学習の目指す方向性であると認識している方は少ないと考えられる。そのため機会を捉え、「生涯学習」を可視化し「生涯学習」を伝える工夫が求められる。

#### <具体的取組>

- 「生涯学習」の理解を進めるためには、前述した「生涯学習ビジョン」や「生涯学習のロールモデル」を示すことに加え、まちづくりに関連するすべての行政各部署等が「生涯学習支援者」としての一定の役割意識を持ちながら、それぞれの業務における地域課題への取組のなかで積極的に市民と関わり働きかけていく。
- そのような関わりや働きかけにより「顔の見える関係」ができ、広い意味で市民への情報発信になる。

先に述べたように市民の「生涯学習」のイメージと「生涯学習ビジョン」が目指す「生涯学習」は必ずしも同じではない。さらに、「生涯学習」という言葉に対して市民が感じるハードルのようなものも軽視できない。そのため、「生涯学習」を伝えるための「市民にとって腑に落ちる言葉」を市民とともに探る取組を行い、その言葉を広く市民に届けていくことが重要である。これらにより「生涯学習」の理解が進み、市民が自ら学ぶよさや可能性を実感できるようになる。

地道な活動を様々な広報手段により可視化し「届ける」「伝える」活動を継続して行うことを期待する。このことが「生涯学習ビジョン」を実現するためのカギになる。

## II ワークショップの記録

### 1 「スポーツ推進委員支援等事業」について

開催日時：令和4年7月19日（火）10時00分～11時30分

担当課所：スポーツ文化局 スポーツ部 スポーツ振興課

参加委員：若原 幸範議長、加藤 美幸副議長

A グループ 井上 久雄委員、村山 和弘委員、林 弘樹委員、佐藤 理恵委員、  
高山 俊介委員

B グループ 溝口 景子委員、桑原 静委員、亘理 史子委員、関根 公一委員

C グループ 石田 玲子委員、小森谷 由紀江委員、千明 勉委員

#### (1) 事業説明

事業概要シート（p.18）を基に、対象事業の「スポーツ推進委員支援等事業」について、所管のスポーツ振興課より説明を行った。

#### (2) グループ発表

各グループで事業について話し合いを行い、発表した。（まとめシート p.19～p.21）

##### <Aグループ（発表者：村山委員）>

まず、現在行われている取組の良い点として、推進委員の存在によって市民の健康寿命が延伸されることが挙げられた。事業の説明にあったように各校のチャレンジスクール※<sub>1</sub>やシニア世代の公民館活動に講師を派遣し、スポーツを行うきっかけづくりをしている点が良い。

続いて新たに考えられる取組としては、一つは行政組織の中でスポーツ推進委員、スポーツ協会※<sub>2</sub>、レクリエーション協会※<sub>3</sub>などに分かれているものを、相互のネットワークを強めることで、健康寿命の更なる延伸や、市の目指す「日本一スポーツで笑顔あふれるまち」の実現に資すると考える。

もう一点、文化芸術活動に既存のネットワークが使えないだろうか、或いはスポーツ推進委員のように新たな委員が作れるのではないかという意見もあった。

その他、中学校部活動の地域移行に関連して、スポーツ推進委員のような地域の方々部活動の担い手になるのではないかと、例えば個別競技の指導者というよりは、部活動の管理者として安全管理や活動の進捗に貢献できるのではないかという意見があった。

##### <Bグループ（発表者：関根委員）>

Bグループは大きく三つのポイントに分けて話をした。

まず、見える化が大事だという意見があった。例えばスポーツにおいても、アスリートを目指す方もいれば、健康づくりが目的の方もいる。そのような環境で、市民にどんな選

択肢があるのか分かりにくい部分もある。例えばドイツの「スポーツフェライン※4」という仕組みが一つの参考事例になる。活動の見える化をしていくことが、生涯教育とスポーツというキーワードでまず一点。

それから二点目で他組織との連携として、新しい取組を活性化するには、ベンチマークやライバルがあると良い。国内ならば、例えば本市と同じ政令指定都市をベンチマークとして交流を図る。また、さいたまはサッカーのまちなので、ドイツのケルンを相手として海外と交流を行うなど、世界を視野に入れると色々なことが深掘りできるかもしれない。

三点目。今までの意見を全部含め、さいたま市のフェスティバルを実施する。単独のスポーツは情報発信にも限界があるが、まち全体で展開して特定の時期に開催する、場合によっては文化的要素も引き入れる。本件のベンチマークとしては、横浜市の「スポーツ・レクリエーションフェスティバル」が参考となる。

以上、三点を挙げたが、小さな自治体ではこのような取組は難しい。一方で東京のように大きい都市だとまた別の理由で難しくなる。しかし、さいたま市は133万人という丁度良い基盤があることで、独自性を出して色々なことができる。

加えて、さいたま市は浦和市・大宮市・与野市・岩槻市が合併して成り立ったため全体での共同意識が少し薄い。このように展開することで、もう一度市民としての自負心や、最終的にはさいたま市で生きることへの満足感が得られ、生涯学習にもメリットがあると考えられる。

### <Cグループ（発表者：石田委員）>

Cグループではスポーツ推進委員のことがよく分からずに疑問だけが出てきてしまい、まとまった話ができなかった。

話をスポーツに絞らずに、まちづくりと生涯学習につながるための観点として、まちづくりの大学や、コミュニティ・スクール、公民館等の拠点を決め地域とつながり、スポーツも、その地域の伝統も、あまり分けずにやっていこうという話をした。

### (3) まとめ

#### <副議長>

今回はスポーツ推進委員を題材として取り上げたが、それだけに留まらず全体的な提言に向けて、各グループで大変活発に議論していただいた。

スポーツ推進委員について詳しく説明していただいたので、議論がそれに引きずられてしまった面があったかもしれないが、例えばもう一つ二つ、簡単に事例紹介していただいて比較して考える、もしくは事例紹介は無くして、ワークショップで一から考えてみようという方向もあると思う。

もっと時間を取れば話が盛り上がり、途中でメンバーチェンジなどをしてみると、他グループの話し合いも分かって、議論にもさらに広がりが見られるだろう。とにかくワークショップという機会を持てたことで、議論が深まった点は良かった。

### <議長>

多くの大事なポイントが指摘されたが、キーワードを二つに絞ってお話したい。

一つはネットワークや連携をキーワードとして、「生涯学習ビジョン」には個人の成長から輪の成長・まちの成長があり、その中心につながりづくりとあるが、実は市民同士のつながりづくりだけではないという話があった。スポーツ分野の中でもまだつながりが深まっていない部分がある。今回はスポーツの話だったが、生涯学習は多様な分野に跨っており、その分野を超えたつながりが薄いということは共通の課題の一つである。これをどう乗り越えるか。その仕掛けとしてCグループではコミュニティ・スクールや公民館などの拠点づくりがあり、Bグループからはフェスティバルを企画して、分野を超えた交流が起こる仕掛けづくりの提案があった。こういった取組をさらに具体化して考えていきたい。

関連してもう一つ、「可視化・見える化」がキーワードとなった。Bグループの発表では、地域の中で生涯学習やまちづくりの多分野で活動されている方を可視化していくことが重要だという話があった。見えるからこそつながることができ、「可視化・見える化」というのは今後大きなテーマになりうる。

### 第1回 発表風景



- ※1 チャレンジスクール … さいたま市は「放課後チャレンジスクール」と「土曜チャレンジスクール」を実施しており、放課後等にスポーツ、文化活動、地域住民との交流活動等を実施するものを「放課後チャレンジスクール」、土曜日等に自主的な学習や体験活動をサポートするものを「土曜チャレンジスクール」と称している。
- ※2 公益財団法人 さいたま市スポーツ協会 … 市民が生涯にわたって豊かなスポーツライフを送ることができるよう、スポーツ活動の場や参加の機会を提供する組織。
- ※3 さいたま市レクリエーション協会 … 市内のニュースポーツやレクリエーション団体が所属し、スポーツ・レクリエーションの普及のため、各種体験事業を開催する組織。
- ※4 スポーツフェライン (Sportverein) … 市民が自主的にスポーツ活動を実施するために組織する法人。フェラインはドイツ語で「協会」、「同好会」などを意味する。

# スポーツ推進委員支援等事業

## (1) 事業概要

スポーツ推進委員は、スポーツの推進を図るため、市から委嘱を受けて活動する非常勤公務員です。スポーツ推進委員は、各種スポーツ教室の企画・運営を行うとともに、市民と行政との連絡調整役としての役割も担っています。スポーツ推進委員で構成されるスポーツ推進委員連絡協議会は市内各10区に支部を組織し、行政及び地域と連携しながら活動しています。

[現状（令和4年3月末現在）]

支部数 : 10支部（各10区）

委嘱委員数 : 242名



市民向けスポーツ大会の様子

## (2) 活動内容

[スポーツ推進委員の活動内容]

- 各種スポーツ教室や大会を開催し、スポーツの実技指導等を行っています。
- 市主催イベントや地域の行事等において、スポーツの指導や運営の協力等を行っています。
- スポーツについての理解を深めるため、各種研修会等に参加しています。

## (3) 事業に関連する市の施策

- スポーツ推進委員の資質向上のため、各種研修会を開催しています。
- スポーツ推進委員連絡協議会に補助金を交付し、スポーツ推進委員の活動を支援しています。
- 市が主催するスポーツイベント等において、スポーツ推進委員の活用を図っています。
- スポーツ推進委員の認知度向上のため、市ホームページや市報などへの記事掲載を行っています。

担当 スポーツ文化局 スポーツ部 スポーツ振興課

まとめシート (Aグループ)

各スポーツ団体が点で動き、  
同じ目的で動いているのに  
広がり見えない。  
ネットワークで動く

場所の提供  
例：自習室 スポーツの練習

スポーツ推進委員のような  
仕組みを文化芸術・地域づ  
くり（指導員・コーディネー  
ター）でも出来ないか

ビジョンの理解ではなく、  
融合（組み込んだ）形で  
浸透していけないか

健康寿命の推進に

健康づくりの重要性が長寿  
社会での生きがいに通じる  
ものと思う

区や学校のPTA組織の依頼  
により、スポーツの体験活動  
の支援  
人づくり→つながりづくり  
ストレス解消コミュニケーシ  
ョン

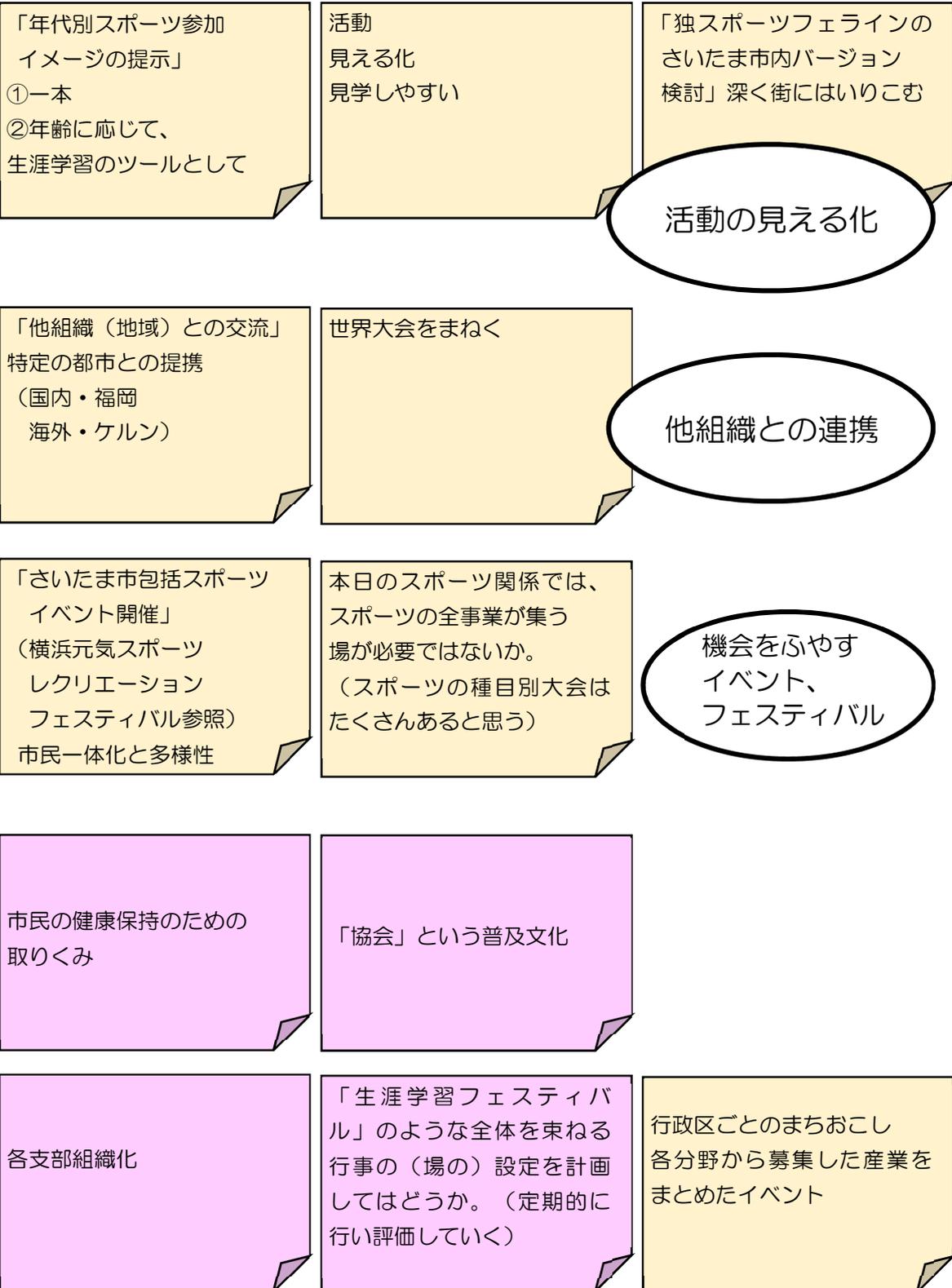
データを明示  
例：予算 学習時間

1. 参考にできること  
 申込、登録の簡素化や廃止
2. 理由  
 参加をスムーズにする

※ まとめシートは実際に話し合った際の付箋メモの写しです

まとめシート (Bグループ)

133万人



まとめシート (Cグループ)

公民館にまちづくり大学校をおく  
コミュニティ・スクール

まちづくり大学校  
(地域づくり)の創設  
↑  
市民大学、シニアユニバから  
一歩焦点化

他分野の推進委員の新設  
(例えば伝統文化とか)

スポーツクラブのインストラクターに推進委員募集をつのる

スポーツ推進において生涯学習の位置づけには誰でも気軽にスポーツを楽しめることが大事。障害を持った方も推進委員として活動できるようにしたい

チャレンジスクールボランティアへの協力  
コミュニティ・スクール

ニュースポーツ以外  
ZUMBAなどを教える人がいるのか?

スポーツ推進委員を意外と知らない

スポーツ推進委員が地区に何名いるのか?

体育振興会との違い

シティマラソンなどさいたま市主催の様々なスポーツ大会での活動において、推進委員をPRする場があれば

P T A 保護者  
元会長 元中学校長  
民生委員 青少年育成会

地域との連携  
コミュニティ・スクール  
地域の方  
伝統、祭り

## II ワークショップの記録

## 2 「消防団の充実強化」について

開催日時：令和4年11月1日（火）10時00分～11時30分

担当課所：消防局 総務部 消防団活躍推進室

参加委員：

- A グループ 若原 幸範議長、井上 久雄委員、小森谷 由紀江委員、  
溝口 景子委員
- B グループ 加藤 美幸副議長、石田 玲子委員、関根 公一委員、  
千明 勉委員、亘理 史子委員

### (1) 事業説明

事業概要シート（p.26）を基に、対象事業の「消防団の充実強化」について、所管の消防団活躍推進室より説明を行った。

### (2) グループ発表

各グループで事業について話し合いを行い、発表した。（まとめシート p.27～p.28）

#### <Aグループ（発表者：溝口委員）>

Aグループでは四つの分野に分けて話をした。

一つ目は発信・PRについてである。消防団新規加入者の50%が既団員からの紹介で入団していると話があったが、逆に言うと残りの50%は全く他所から入ってきていることになる。様々な方法で発信をされていることは本当に素晴らしく、他所から入ってくる人が増えるきっかけとなっている。また、新しい分野だと動画配信サイトなどで消防団員が踊ってみた動画を上げるのも楽しいのではないかという意見もあった。

二つ目は多様性について。例えば、どうしても災害時には情報から取り残されてしまう可能性の高い外国語話者が、気軽に参加できる環境があると良い。また、女性団員の入団を促すため、更衣室の用意など環境づくりを充実すると参加しやすいという意見があった。

そして三つ目が地域について。「活動の見える化」をして、気軽に団に参加できる空気ができるとう良い。また、消防団単独ではなくて地域の団体や、NPOなどとも連携し、地域の公民館の生涯学習講座などで、消防団の方にお話を聞ける学習会を開くと、入団のきっかけになるという意見があった。

最後に学校関連について。子ども達が消防に関する防災教育などをしっかり受けて、小さい頃から消防・防災への意識を高めることが大切である。また、コミュニティ・スクールのメンバーとして消防団員が加わると地域での防災の意識が強まるのではないか。保育園等でチラシを配布すると若い保護者にも広まるのではないかという意見もあった。

<Bグループ（発表者：千明委員）>

Bグループでも四つの分野に分けて話をした。

一つ目は仕事内容、講座の中身について。それから二つ目が待遇。取り組む人たちのモチベーションの喚起・維持・向上について。三つ目は広報について。四つ目が安心・安全についてである。

一つ目、仕事内容について。学校との連携や防災という要素は生涯学習のテーマとして非常に参考になる。

二つ目、待遇については、生涯学習活動の参加者のモチベーション維持のため資格の付与や表彰を行うことが挙げられた。消防団員には非常勤特別職としての待遇が与えられているが、例えばマイナポイントを活用するのはどうかという話が出た。

つづいては広報について。消防団はあらゆるメディアを使い、本当に上手に広報している。リーフレットの件も話題になったが、アプローチしたい層を見定め、そのためには誰を起用するかという熱意が現れている。ユーチューバーやアナウンサーなど発信力のある方を活用しながら、積極的に広報していくことが重要と感じた。

最後は安心・安全について。消防団活動は安心・安全が大きなテーマとなるが、やはりわかりやすいテーマを掲げる事は重要である。そして目標に向かって複数の機関が結び合い、ウィンウィンの関係をつくりながら進むことが大事である。

私は先日岩槻区の公民館まつりに参加した際、地域の方々が成果の発表をしているのを拝見した。発表の場があり、それを目標として普段の活動を行うサイクルを作り出していくことが、学びや人づくりをしていく上でとても大事だという意見もあった。

**(3) まとめ**

<副議長>

今回は私もグループの一員としてワークショップに参加し大変勉強になった。また、議長の声掛けで、今回自主的に集まりいただいた事実が素晴らしい。

私の参加したグループには様々な立場の委員がいらしたので、それぞれの立場からの意見が出た。その様々な意見を四つのカテゴリーに分類し、まちづくりにつなげていくためには安心・安全が大事だという話や、最後に学びと活動の循環が大事だという形でまとめられたことが素晴らしい。このように意見を分類し、方向性を定めながら進めたい。

また話し合いの中で、一人ひとりが思い切った行動をすることが大事であり、消防団活躍推進室の行動力はその模範となるという意見があった。

<議長>

前回ワークショップでは、二つのキーワードを出した。

一つは活動の可視化という点である。これは今回のワークショップでも共通した論点として、特に広報や情報発信という面で活発に意見があった。

特に消防団活躍推進室は非常に情報発信に対するアンテナが高く、チャンスを掴んで広報活動に繋げていることは、様々な分野においても参考になる。

そして前回キーワードとしてもう一つ、ネットワークや連携ということ挙げた。今回は防災をキーワードとして、消防団、町内会自治会や、様々な市民団体等、そして特に重要な学校と地域の連携について意見が出された。

Aグループの議論で、コミュニティ・スクールを推進する中で、学校に地域をつなげていく、或いは地域が学校を応援していくという双方向の関係で作っている。そこに例えば防災をキーワードとすると消防団などが関係の中に入ってくる。学校を拠点にした地域のネットワークも、生涯学習の面でも重要な観点だと思う。

前回まとめた二つのキーワードに加え、今回は多様性というテーマについて議論があった。ジェンダーや外国語話者への配慮という観点だけでなく、実際に参加してもらうことで見えてくる視点や、活動の広がりもある。多様性に生涯学習の立場からアプローチすることもビジョンの重要な理念の一つであり、今回の提言として具体化していきたい。

## 第2回 発表風景



# 消防団の充実強化

## (1) 事業概要

消防団は、その地域に「住んでいる」「働いている」人によって構成される市町村の消防機関です。火災による消火活動をはじめ、風水害、震災時等の災害活動や、催物の警戒、住宅用火災警報器の設置促進などの火災予防広報等を行っています。

[現状（令和4年4月現在）] 定員：1432人

団本部付：広報指導分団					
西区	4分団	北区	3分団	大宮区	7分団
見沼区	6分団	中央区	6分団	桜区	5分団
浦和区	8分団	南区	7分団	緑区	8分団
岩槻区	11分団	合計	66分団		



さいたま市総合防災訓練の様子

## (2) 活動内容

[消防団員の活動内容]

- 火災、地震、台風などの災害が起きたら、消防署と一体となって、迅速に消火活動などを行います。
- 災害を未然に防止するため、火災予防運動や、地域の催し物が行われるときに、火災予防の呼びかけや警戒活動を行います。
- 平時においても、災害対応のための訓練や、資機材の整備点検などを行い、災害活動力を高めています。
- 大規模な災害（震災など）に備えて、住民一人ひとりの防災行動力を高めるため、初期消火や応急手当の指導を行っています。

## (3) 事業に関連する市の施策

- 消防団充実強化計画を策定し、計画的に消防団の充実強化を行っています。
- 消防団活動に即した施設や車両の整備を行っています。
- 消防団の活動能力向上のため、教育訓練を実施しています。
- 消防団の認知度を向上させ、地域との連携強化を図るため自治会及び自主防災会との訓練等を実施しています。

担当 消防局 総務部 消防団活躍推進室

まとめシート (Aグループ)

発信

情報発信への  
アンテナを高く

Tik Tok  
生活に使えるネタ  
+  
ダンス

新参者への  
ハードル下げる  
50%の  
ツテじゃない人いる！！

様々なPR活動を  
されていること  
(発信)

多様性

外国籍住民の参加

男女差 やれることを示す  
But  
住民は男女半々

女性の参加

女性が入団したい  
環境整備  
(更衣室や  
ホースのまきとり作業)

学校

学校の教育現場に  
地元消防団を参加させ  
防火意識向上を  
図る

学校での  
防災教育への  
啓発参加

中学校の総合授業での  
フィールドワークの際に  
消防団の活動を  
みせてほしい

コミュニティ  
スクール

保育園で啓発時、  
パパママ向けにも  
チラシを配布  
→対象者+家族へPR

防災教育を  
キーワードに  
ネットワーク化

地域

日常の消防団の  
活動を広く住民に  
周知させるには  
地域活動への  
積極的な参加

常設消防はレスキューとか  
花になる部分があるが、  
消防団は山狩りなど  
刺子の半纏の  
イメージがある  
イメージUPを

地域の分団にこだわらず  
区単位で本人の意向に  
沿っての入団

宣伝をする際  
身近な方の活躍が  
わかるとよい

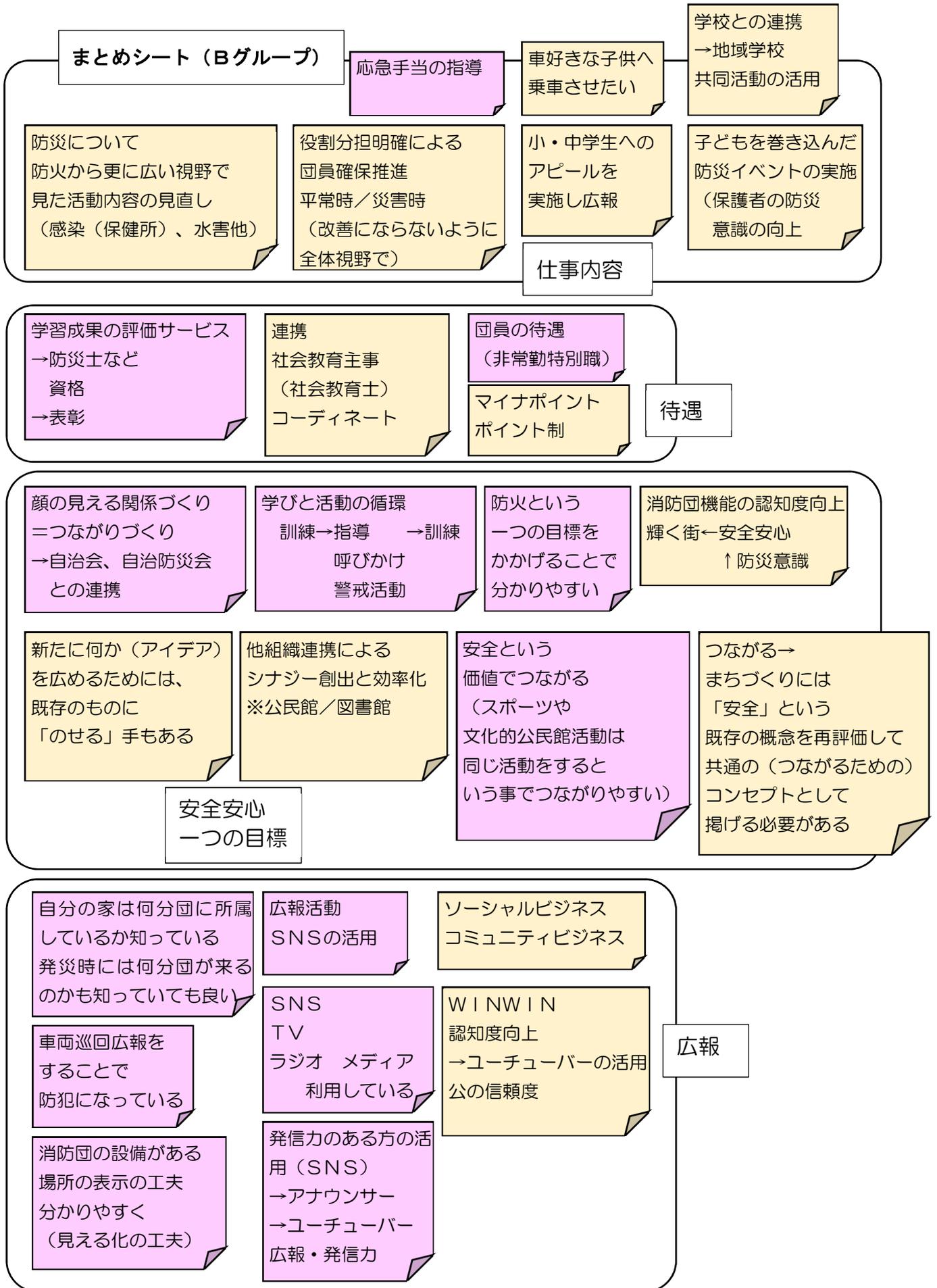
地域の自主防災会、  
自治会が購入する  
防災備品等のアドバイス

活動の見える化をして、  
気軽に参加できる  
気になれるとよい

消防団員さんへの  
講師登録推進

実際の活躍事例を  
広く発信

地縁団体と  
NPO・市民団体の  
連携



### 3 「高齢者大学事業（シニアユニバーシティ）」について

開催日時：令和4年11月24日（木）10時00分～12時00分

担当課所：保健福祉局 長寿応援部 高齢福祉課

オブザーバー：さいたま市シニアユニバーシティ校友会連合会 大田 章会長

参加委員：

A グループ 若原 幸範議長、石田 玲子委員、塚元 夢野委員、溝口 景子委員

B グループ 井上 久雄委員、桑原 静委員、小森谷 由紀江委員、関根 公一委員

#### (1) 事業説明

事業概要シート（p.32）を基に、対象事業の「高齢者大学事業（シニアユニバーシティ）」について、所管の高齢福祉課とシニアユニバーシティ校友会連合会より説明を行った。

#### (2) グループ発表

各グループで事業について話し合いを行い、発表した。（まとめシート p.33～p.34）

##### <Aグループ（発表者：塚元委員）>

今回は校友会の方から実態をお聞きしながら話すことができたことが良かった。

一点目は人づくりや学びのきっかけに関して、シニアユニバーシティはシニアの学びのきっかけづくりとなっており、出前講座の話にあったように各人が持っている特技を生かすことができることが非常に良い。

次につながりづくりとしては、各世代や地域のつながりを考えると、せっかく色々なスペシャリストが集まっているので、外に向けてお祭りを開催してはどうかという話や、公民館等で講師が活躍できる場が欲しいという話があった。

シニアユニバーシティは内部のつながりが緊密なので、さらに世代を超えたつながりづくりができると良い。例えば交流施設等に昔の遊びコーナーを作って、子育て世代の人が遊びに行けるという企画があると、世代を超えたつながりづくりにもなる。

シニアユニバーシティの方々が、ファミリー・サポート<sup>※1</sup>や緊急サポートサービス<sup>※2</sup>のような子育てボランティアに申し込んでいただけたらありがたい。私自身も子育て世代として地域のシニアの方々に助けていただけないかと日々思っているので、ニーズがあるところにマッチングしていくことも一つの手である。

また、入学金・授業料が0円で仲間づくりができることや、プロをボランティアで呼べる話も非常に魅力的だったが、そのことを知らない方も多いので、さいたま市は30代50代、そしてシニアも住みやすい街ということはまだ知らない方々に向け、家をどこに建てようとか、終の棲家をどこにしようかと迷っている人たちにどんどんPRして欲しいという意見もあった。

情報発信に関連して、シニアの情報網はSNSやインターネットではなく、リアルな口コミで広がっているという話もお聞きし、非常に面白いと感じた。その一方で現在50代・

60代の人はかなりICTにも慣れ親しんでいるので、今後SNS等の利用も増えていくと考えられる。

高齢化に関連し、シニアユニバーシティの中では70代でも若者という話もお聞きし、これも面白いと感じた。私自身も仕事や私生活の中で、なかなか若い人がリーダーになってくれないという話をよく聞くので、リーダー層の高齢化はどこの組織でも共通した課題だと思った。

### <Bグループ（発表者：桑原委員）>

まずシニアユニバーシティは生涯学習ビジョンの理念でもある、学んでつながって、学びを生かすということを体現する場である点が素晴らしいと、皆様の意見を聞いて改めて感じた。

Aグループの発表でもあったが、PRが少々弱いところは課題である。本日のようにシニアユニバーシティを知らない方に説明する時に使える資料がなく、募集期間のPR活動ではない、普段から見てもらう資料や動画が必要だという話があった。

授業に関して、Zoom等を活用したオンライン講座も今後必要ではないか、現在も卒業生に講師として来ていただくことがあるが、卒業生による授業枠を設けて、さらに積極的に学びを生かす場があっても良い。

また、卒業後の進路に関しては、現在も授業の中でシルバー人材センター<sup>※3</sup>やさいたまファミリー・サポート・センター等を紹介しているが、実際になかなか繋がっていかないため、高校のように個人面談をして、一人一人に丁寧に紹介に行くことも良いかもしれない。

り・とらいふ<sup>※4</sup>のような相談窓口もあるが、やはり少々距離を感じる方もいるので、いつも皆様がいる活動ステーションの中に、進路の相談窓口があっても良い。そこで届ける情報の中に、現状でも会長から説明いただいたように様々な活動やボランティアがあるが、全ての情報を一元化して把握できていないので、卒業後、公的な窓口だけではなく、卒業生を受け入れてくれる団体やボランティアの情報を提供する基盤の整備も必要と考える。

つづいて、これもAチームの発表にもあったが、他部署や学校、コミュニティ・スクール等との連携も必要であり、今後定年が70歳以上に上がっていく時に、どのように社会変化に対応していくかも考えなくてはならない。

他にはシニアユニバーシティの前から通えるオンラインのプレスクールがあれば、広報にも役立つし良いのではないかという意見もあった。

### (3) まとめ

#### <議長>

Bグループの発表で触れられたことだが、生涯学習ビジョンが目指す「個の成長」から「輪の成長」そして「まちの成長」、地域の発展につなげていくことを考える際に、本当にシニアユニバーシティはその典型であり、重要な報告をいただいた。

これまでのワークショップでは、議論の中でネットワーク、多様性、そして可視化という大きく分けて三つのキーワードが挙げられたが、今回の報告やグループの議論でもこのキーワードには改めて触れられていた。

まず、ネットワークの観点として、多様な分野の機関や関係者とのつながりを深めることは、講座の学習内容を豊かにするためでもあり、また学習した後の活躍の場を広げていく際も意義を発揮するため、多くの分野で拡充していくべきである。

そして多様性の観点では、今回特にシニアユニバーシティを取り上げたことで世代間の交流、特に高齢者と若い世代の交流をどのように進めていくか改めて示された。

つづいて、可視化の問題である。これもやはり多くの領域で課題となっているが、さいたま市の生涯学習を考える上で、とても重要な論点だという改めて確認した。

これらに加え、今回特にまちづくりに関わるものとして、学習の成果の生かし方や活躍の場という視点が深められた。地域でまだ見つかっていないニーズがたくさんあるのではないかとAグループの発表でもあったように、例えば今、ファミリー・サポートの担い手が少なくなっている状況があり、そこに高齢者の方が参加してもらえないかというような、地域のニーズと学習を経て活躍の場を求める人のマッチングが重要になる。

社会教育の観点から言うと、特に地域に根差した公民館等がそのようなニーズを集約しつつマッチングできる拠点になっていくと良いかもしれない。

地域にどう結びつけていくのか、地域のニーズにどう結びつけていくのかというところは、今回のワークショップで改めて掘り下げられた部分である。

- ※1 さいたまファミリー・サポート・センター … 保育施設等への送迎、開設時間外の児童の預かりなどを行う会員組織。
- ※2 さいたま市子育て緊急サポート … 病児・病後児の預かり、朝・夜間等の緊急時の預かり、宿泊を伴う児童の預かりなどを行う会員組織。
- ※3 シルバー人材センター … 社会参加意欲のある健康な高齢者に対して、地域社会と連携しながら、その希望に応じた就業並びに社会奉仕等の活動機会を確保するもの。
- ※4 り・とらいふ … 定年退職後や子育てが一段落した中高年齢層の市民に、ボランティア、就労、生涯学習等に関する相談・情報提供を行う窓口。

# 高齢者大学事業（シニアユニバーシティ）

## (1) 事業概要

シニアユニバーシティは、60歳以上の方を対象に1年間の講義を通じて、心身の健康増進、地域での仲間づくり、生きがいを目指し、また、地域社会でご活躍いただける人材の育成に取り組んでいます。

### 【現状（令和4年度4月）】

入学者数	(人)	
	大学	大学院
岩槻校	53	17
北浦和校	80	51
大宮校	80	58
中央校	55	16
東浦和校	51	19
北大宮校	48	12
福祉専修科	—	27
音楽専修科	—	30
ICT専修科	—	15
合計	367	245

シニアユニバーシティ校友会連合会 会員数 (人)	
岩槻校協議会（休会中）	261
北浦和校協議会	367
大宮校協議会	568
東浦和校協議会	785
北大宮校協議会	174
合計	1,894

※ 休会中の岩槻校を除いた数

## (2) 活動内容

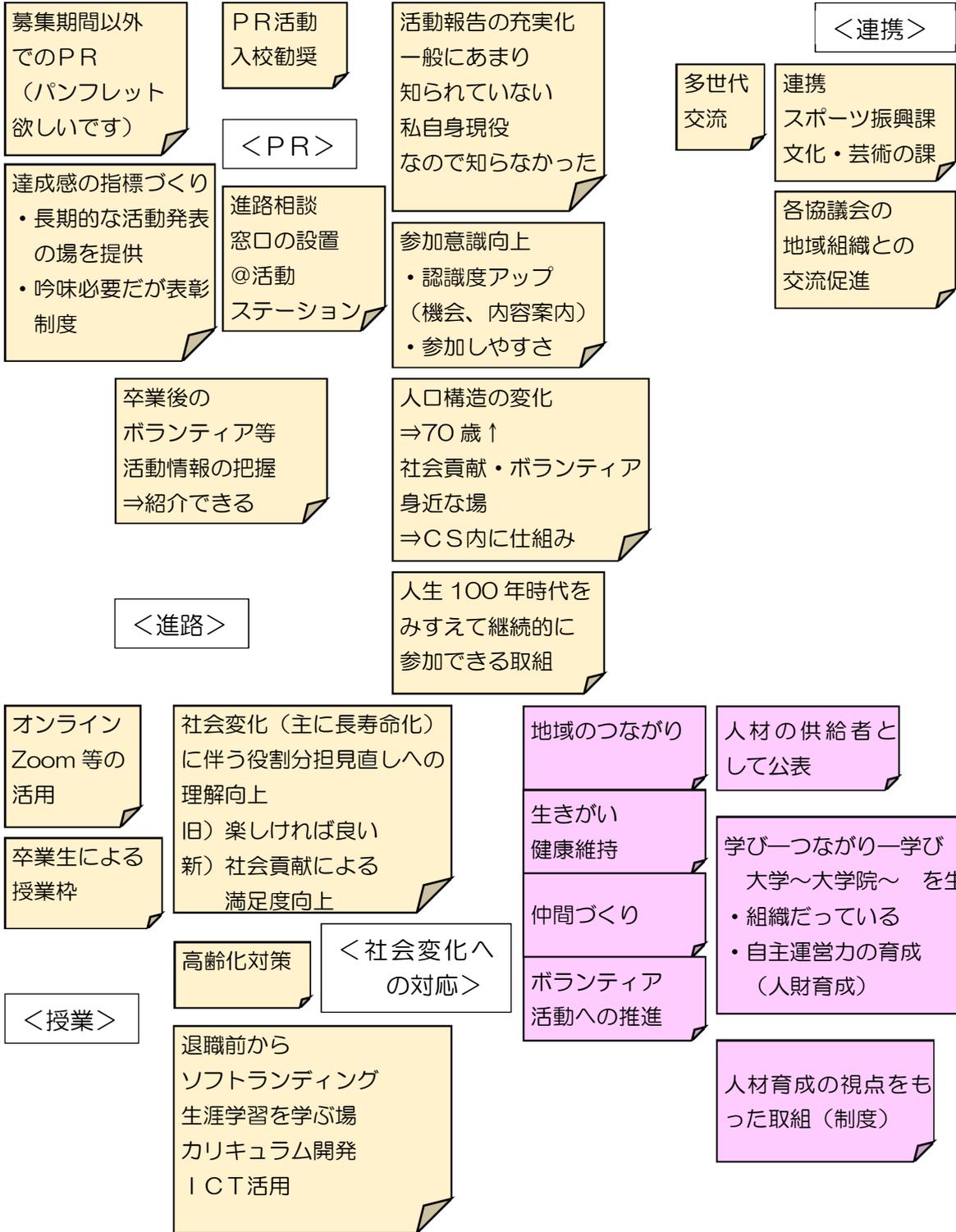
### 【シニアユニバーシティの活動内容】

- 1年目に大学、2年目に大学院を開設しています。セカンドライフをいきいきと過ごすために必要な教養を学んでいきます。
- 授業外で自主的にクラブやボランティア活動に取り組みます。
- 希望者は、卒業生で結成された自主運営団体（シニアユニバーシティ校友会連合会）へ加入することで、地域での活動を継続して行うことが可能です。

## (3) 事業に関連する市の施策

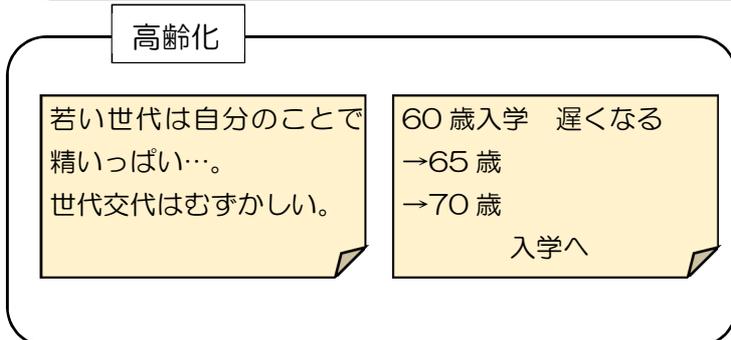
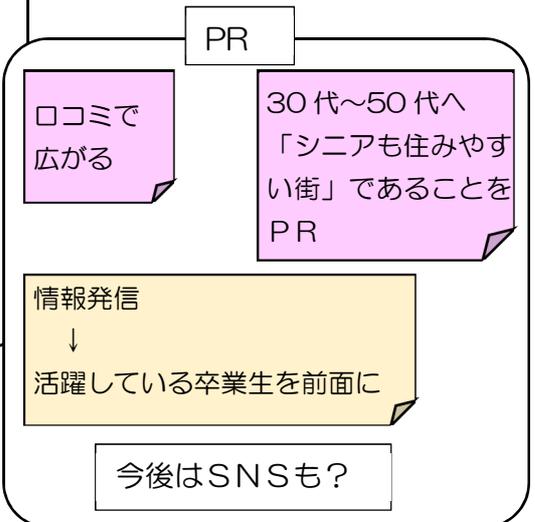
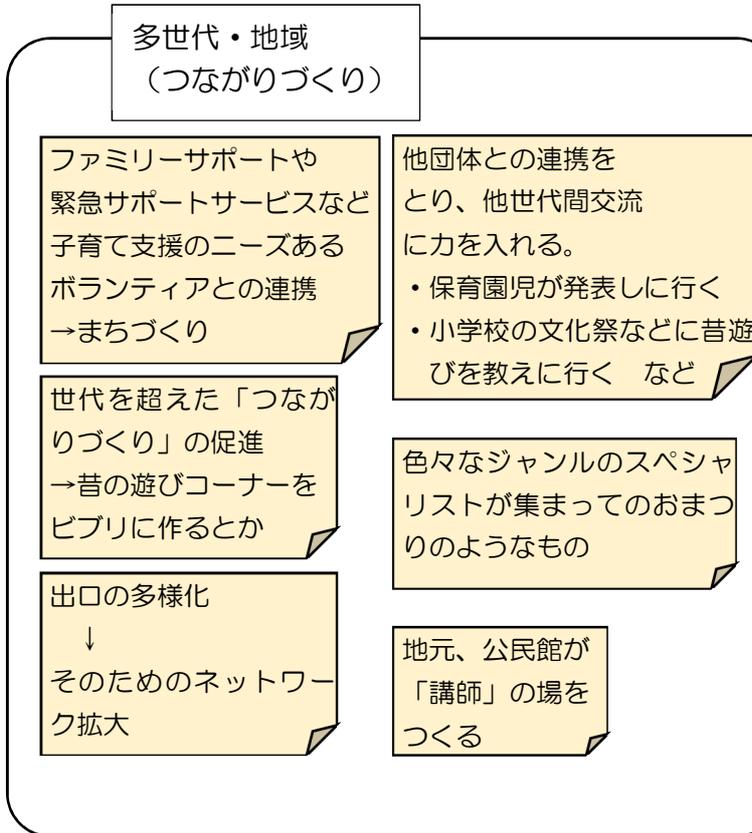
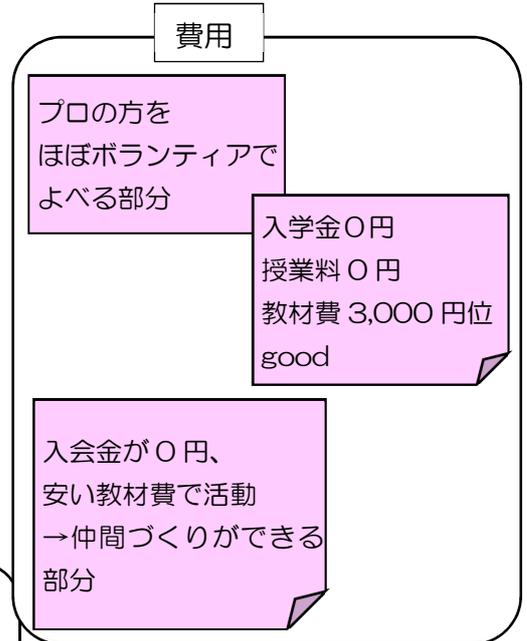
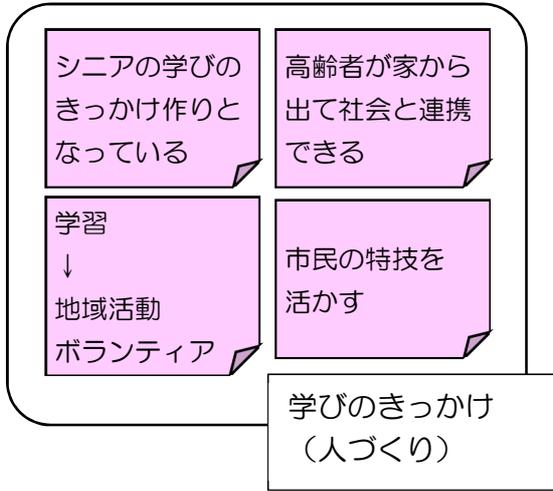
- 在学生及び卒業生が、学んだ内容を地域で発揮することができるよう、ボランティア活動先等の情報提供を行っています。
- シニアユニバーシティ校友会連合会に補助金を交付し、卒業生の活動を支援しています。

まとめシート (Aグループ)



まとめシート (Bグループ)

今日行く、今日用 (事) 家から出る  
“教育” “教養”



### III まとめ

第11期の社会教育委員会議は、前期に作成された「さいたま市生涯学習ビジョン」を実現するための方策と、生涯学習ビジョンへの理解を広げるための方策についての提言を取りまとめることを目的に検討を重ねた。生涯学習ビジョンでは、目指す姿として「生涯の学びを通じて、自分とまちが輝く未来」を構想し、「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」の循環的な発展を目指している。そのなかで、さいたま市の生涯学習を「まちづくり」へいかに展開させるかが検討の特に重要な焦点になった。

検討の過程では、市内で活発に展開しているスポーツ推進委員支援等事業、消防団の充実強化事業、高齢者大学事業（シニアユニバーシティ）の取り組みに学ぶ3回のワークショップを中心に議論した。そこで確認された視点が、①学びの可視化・見える化、②学びのネットワーク化や活動の連携・協働、③学びの多様性への配慮、④学びの成果を発揮・活躍する場の提供であった。第I章で示した提言は、これらの視点を基に具体化したものである。

ワークショップを通して確認されたが、さいたま市においては社会教育・生涯学習の実践が既に豊かに展開している。また、生涯学習情報システムや動画による講座等、インターネットやICTツールも積極的に取り入れられており、市民の学びへのハードルを下げ、多様な学びの機会をつくる工夫がなされている。これらの成果を地域の生涯学習の重要な資源と捉え、それぞれのより一層の発展と同時に、生涯学習ビジョンの構想の下に再編するという点も、本提言において重視した視点である。

他方で、先に示したような多様性への配慮やコロナ後の社会状況への対応など、現代的課題にいかに向き合い、取り組んでいくかは大きな課題である。こうした点についても一定程度は提言に盛り込んだつもりである。しかし、激しく変動する現代社会において、この点は常に見直しとバージョンアップを続けることが必要である。生涯学習ビジョンの推進を中心的に担う社会教育行政をはじめ関係各部署、また次期社会教育委員会議においてもこの点は強く意識していただきたい。

本提言は多くの方々の熱意と協力によって編まれたものである。ワークショップでは担当部署の職員や実際に活動している市民の方にも貴重な実践をご報告いただき、私たちの議論に大きな刺激とアイデアをくださった。社会教育委員の皆様は毎回活発で質の高い議論をしてくださり、手弁当でのワークショップ開催という議長提案にも快く応じてくださった。さらには、私を取りまとめた提言文案をそれぞれが細部まで読み込んで修正案を提示してくださり、最後まで変わらぬ熱意で提言作成に取り組んでくださった。本提言の作成に関わった全ての方に、議長として記して感謝申し上げます。

本提言がさいたま市の生涯学習振興施策に活かされ、市民の充実した学びと豊かなつながりづくり、そして活力あるまちづくりに貢献できることを願っている。

（第11期さいたま市社会教育委員会議 議長 若原幸範）

## 資料編

## 1 第11期さいたま市社会教育委員会議 審議経過

回数	開催期日	主な審議内容等
第1回	令和3年11月15日	<ul style="list-style-type: none"> <li>さいたま市生涯学習ビジョンについて</li> <li>生涯学習推進計画関連事業調査について</li> <li>第11期社会教育委員会議における審議内容について</li> </ul>
第2回	令和4年1月13日	<ul style="list-style-type: none"> <li>コロナ禍における生涯学習関連施設での取組等について</li> <li>第11期社会教育委員会議における審議内容について</li> </ul>
第3回	令和4年3月18日	<ul style="list-style-type: none"> <li>第11期社会教育委員会議の進行について</li> </ul>
第4回	令和4年7月19日	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和4年度社会教育関係団体補助金について</li> <li>第11期さいたま市社会教育委員会議ワークショップについて（スポーツ推進委員支援等事業）</li> </ul>
自主会	令和4年11月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>第11期さいたま市社会教育委員会議ワークショップについて（消防団の充実強化）</li> </ul>
第5回	令和4年11月24日	<ul style="list-style-type: none"> <li>第11期さいたま市社会教育委員会議ワークショップについて（高齢者大学事業）</li> </ul>
第6回	令和5年1月23日	<ul style="list-style-type: none"> <li>第11期さいたま市社会教育委員会議提言の構成について</li> </ul>
第7回	令和5年3月14日	<ul style="list-style-type: none"> <li>第11期さいたま市社会教育委員会議提言の骨子について</li> </ul>
第8回	令和5年7月4日	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和5年度社会教育関係団体補助金について</li> <li>第11期さいたま市社会教育委員会議提言案について</li> </ul>

## 2 第11期さいたま市社会教育委員名簿

(任期：令和3年10月1日～令和5年9月30日)

	氏名	選出母体等	選出区分	備考
1	若原 幸範	聖学院大学	学識経験者	<b>議長</b>
2	加藤 美幸	十文字学園女子大学	学識経験者	<b>副議長</b>
3	石田 玲子	さいたま市 公民館運営審議会	社会教育関係団体	
4	井上 久雄	青少年育成 さいたま市民会議	社会教育関係団体	
5	桑原 静	特定非営利活動法人 さいたまNPOセンター	社会教育関係団体	
6	溝口 景子	さいたま市 PTA協議会	社会教育関係団体	
7	村山 和弘	(公財)さいたま市 スポーツ協会	社会教育関係団体	R4年11月23日まで
	吉川 洋一			R4年11月24日より
8	小森谷 由紀江	埼玉県児童福祉審議会	家庭教育の向上に 資する者	
9	林 弘樹	映画監督	学識経験者	
10	亘理 史子	浦和大学	学識経験者	
11	佐藤 理恵	公募委員	公募委員	
12	関根 公一	公募委員	公募委員	
13	塚元 夢野	公募委員	公募委員	
14	内田 崇史	さいたま市立小学校 校長会	学校教育関係者	R4年3月31日まで
	千明 勉			R4年7月19日より R5年3月31日まで
	藤田 成司			R5年7月4日より
15	高山 俊介	さいたま市中学校長会	学校教育関係者	R5年3月31日まで
	石崎 敬吾			R5年7月4日より

この冊子は 300 部作成し、1 部あたりの印刷経費は 121.61 円（概算）です。